

ヲ格とニ格の使用から見る心理動詞の語彙的特徴

—心理動詞述語文を中心に—

趙 仲

A Study on Lexical Character of Japanese Psych-verbs:

Basically on Usage of Case “o” and “ni” When the Verbs Are Used as Predicates

Zhong Zhao

关于日语心理动词的格助词使用问题，我们知道：“o（を）”提示对象内容，“ni（に）”提示对象或者原因。先前的研究大多止步于此，没有系统地做下去。因心理活动的格助词使用情况与其在句子中的功能和位置有关，本研究将讨论对象圈定为心理动词在陈述句中作谓语的情况。通过例句分析，本文将影响心理动词的格助词使用的因素分为句子结构和语意影响两种情况。前者指受“o（を）+表示作用接收方的ni（に）”这一句子结构制约的心理动词；后者指不受这一结构制约，单独使用“o（を）”，或单独使用“ni（に）”的心理动词。本文以后者，即格助词使用受单纯语意制约的心理动词为中心，将这类心理动词的格助词使用情况分为了“o（を）”，“o（を）”或“ni（に）”和“ni（に）”三种情况，并通过调查得出三种格助词使用情况不是互相孤立的，而是具有连续性的。具体表现为，使用格助词“o（を）”的心理动词中有一部分词的格功能开始向“ni（に）”转变，使用格助词“ni（に）”的心理动词中有一部分词的格功能开始向“o（を）”转变。由此，将格助词使用受语意制约的心理动词分成了既互相区别又相互联系的五类。此外，本文具体讨论了这种制约心理动词格助词使用的语意特征具体体现为主体性。即按照主体性由强到弱的顺序，心理动词的格助词使用情况依次为：“o（を）”、开始向“ni”发生功能转变的“o（を）”、既可用“o（を）”也可用“ni（に）”、开始向“o（を）”发生功能转变的“ni（に）”、“ni（に）”。

一、はじめに

言語は、世界のあらゆる事物の客観的な反映と話し手の主観的な捉えからなる有機的な総合体である。その中には、客観的実在世界から離れ、もっぱら人の主観的な活動を表すものもある。人の内的活動を表す心理動詞や感情表現などがそのようなものと言えよう。これらに関する研究は従来から注目されているものの、主に感情形容詞中心に研究が行われており、心理動詞の研究は70年代に入ってから研究の舞台上がり始めたようである。

それ以来、人の内的活動を表す心理動詞に対する研究は注目されるようになった。網羅的に見ると、研究は大体以下の四つの分野に分けて進められていると思われる。

- i. 心理動詞の位置づけと基本性質
- ii. 形容詞との比較研究
- iii. 会話文における人称制限
- iv. 格助詞の使用

紙幅の関係で、簡単に各分野の研究概況をまとめてみることにする。

- i. 心理動詞の位置づけに関しては、基本的に心理動詞を動作動詞として扱う研究は多数であるが、工藤（1995）では、心理動詞は外的運動動詞と静態動詞との中間に位置づけられている¹。心理動詞の基本性質に関しては、新屋（1989）、三原（2000）、吉永（2008）などでは心理動詞の持続性、意志性などの性質をめぐって論述が行われてきた。

¹ 工藤（1995）では、時間のなかに成立（開始）・展開・消滅（終了）し、場合によっては、結果を残す、ものの動態的な運動をとらえている動詞らしい動詞を外的運動動詞と、時間のなかへの現象を問題にしえない、あるいは、時間のなかに現象したとしても、時間的展開のない、スルーシテイルのアスペクト対立が成立しえない動詞を静態動詞と呼んでいる。両者の中間的のものを内的情態動詞と呼んでいる。この内的情態動詞は本稿の心理動詞に相当する。

- ii. 形容詞との比較研究では、寺村（1982）、堀川（1991）、小竹（2011）などが心理動詞を感情形容詞と比較して分析し、主に感情形容詞がより主観的、且つ静的、心理動詞がより客観的、且つ動的な性質を持つこと、両者が時間的な性質に現れる相違などに関して研究が行われてきた。
- iii. 心理動詞の人称制限は、心理動詞における最も重要な特徴として、先行研究で盛んに取り上げられている。結論としては、会話に使われる場合、三人称主語文は安定性に欠け、テイル形の補助を必要とするという点において一致している。
- iv. 心理動詞の格研究に関しては、格助詞ヲと格助詞ニの使用研究に集中している。寺村（1982）では、ヲ格は能動的感情の動き、ニ格は一時的な気の動き・受身的感情を表すと指摘されている。また、岩澤（2000）、松野（2010）などでも格助詞に関する論述が行われており、ヲ格は対象、ニ格は対象と原因を表すという点においては一致している。

本研究は心理動詞の格使用に関する研究であり、ヲ格とニ格の区別と関連性をめぐって展開したものである。具体的に、今までの心理動詞の格研究では、ヲ格とニ格の二種があり、意味的に相違があると指摘されているが、心理動詞の語彙的特徴が格の使用にどのような形で関与しているかについてはあまり論じられていない。また、言語資料を調べたところ、心理動詞が文末述語として使われる場合とテ形中止や、連体修飾語などとして現れ、文末述語でない場合とは格助詞の使用に差異が見られるようであるが、この差異に関してはほとんど注目されていない。さらに、心理動詞の格使用には、ヲ格が対象、ニ格が対象と原因を表すと、従来から認められているが、ヲ格の対象とニ格の対象・原因とははっきりと区別されうるのか、それとも、何らかの形で連続的に捉えられるの

かなどの疑問も未解決である。

上述の問題点を踏まえた上で、本研究は、下記の基本点に立ちながら、研究を進めたい。

- (1) 心理動詞の意味的特殊性を考慮した上で、格助詞の使用分析を行う。また、心理動詞が述語として陳述文の文末に使われる文を心理動詞述語文と仮称した上で、本研究は基本的に、心理動詞述語文に限定する。
- (2) 格分析に関しては意味的には「対象」と「原因」、標記的にはヲとニに限定する。
- (3) 従来の研究の、ヲは対象、ニは対象・原因を表すといったはっきりとした二分法をやめて、連続的な視点で問題解決の可能性を試みる。
- (4) 心理動詞の語彙的な特徴を格助詞の使用と機能に関連づけて検討する。

二、研究対象の限定と研究方法

研究に入る前に、本稿の研究対象を明確に限定しておく。本稿は、「人の内的活動を表す」という心理動詞の定義に従い、国立国語研究所の少納言を資料として、次のよく使われている20個の心理動詞の心理動詞述語文を抽出し、研究対象としている²。

² 研究対象の定めに関する説明：(1) 定義として、人の内的活動を表す。(2) 実用にあたり、常用されているもの。(3) 形式的には、漢語と和語からなる。(4) 意味的には、感情的、感覚的、思想的なものを含む。但し、「思う」「分かる」「見える」「聞こえる」なども常用されている心理動詞であるが、用法としては、モダリティ化的な用法や可能動詞に似ている用法を持ち、心理動詞においても特殊な存在であるので、本研究では排除する。また、「計画する」などの心理動詞は何かをするという行為的な意味が読み取れる可能性が大きいので、外的運動動詞に似ている用法を持っていると扱って、研究対象から外すことにする。これらの“特殊”心理動詞に対する研究は別稿で扱う。

愛する、諦める、飽きる、祈る、恐れる、驚く、我慢する、感謝する、希望する、苦しむ、後悔する、困る、信じる、心配する、頼む、疲れる、悩む、迷う、満足する、喜ぶ

抽出作業にあたり、次のことを断っておく。資料では、動詞が仮名や漢字、または簡体や丁寧体などで書かれているが、それはヲ格かニ格かという使用状況にはほとんど影響を及ぼさないので、今回の研究では各動詞の漢字形式の簡体文を代表として例文を集めることにした。例えば、動詞「愛する」としては「～愛する。」「～愛した。」「～愛している。」「～愛していた。」という四種類の文、動詞「喜ぶ」としては「～喜ぶ。」「～喜んだ。」「～喜んでる。」「～喜んでいた。」という四種類の文を収集することにした。

三、統計分析と問題解決

まずは、研究対象とする20個の心理動詞をキーワードにして、例文を抽出した。簡単に、量的に整理すると、表1の結果を得た。

表1：心理動詞述語文一覧

単語	例文数	単語	例文数
愛する	187	後悔する	159
諦める	88	困る	564
飽きる	28	信じる	562
祈る	240	心配する	160
恐れる	146	頼む	588
驚く	778	疲れる	247
我慢する	84	悩む	163
感謝する	223	迷う	199
希望する	75	満足する	173
苦しむ	188	喜ぶ	402
合計		5254例	

例文数の列で示す数字は、その左列目の単語が「～ル。」「～タ。」「～テイル。」「～テイタ。」の四つの形式の例文総数である。例えば、「愛する」に関しては、「～愛する。」「～愛した。」「～愛している。」「～愛していた。」四種類の文の総数は187例ある。「諦める」に関しては、「～諦める。」「～諦めた。」「～諦めている。」「～諦めていた。」四種類の文の総数は88例ある。同じデータベースを利用して例文を抽出しているが、心理動詞述語文の数においては778例ほど多いものもあれば、28例のような少ないものもある（実は少納言では検索結果はキーワードごとに500例の例文しか示されないので、実際の例文数は今の統計結果を上回る場合もある）。今のところ、動詞使用に見られるこの大きな差が何を意味するのかについては、はっきりと説明できないが、それは恐らく文末ではなく、修飾や中止形で使われやすいとか、終助詞と伴って使われやすい動詞があるとかいった構文的理由に関係があるのではないかと考えられる。本研究は、全体的に各動詞の使用率対比ではなく、動詞ごとにそれぞれヲ格とニ格の使用実態を調べることを目的とするものなので、全体的に各動詞の使用率に現れる数値の差は本研究に影響を及ぼさない。それを今後の研究課題に譲ることにする。

さて、表1で示した5254件の例文分析を通して、これらの動詞のヲ格とニ格の格使用で現れる比率を見ておこう。

表2から分かるように、20個の心理動詞は、まず、格使用において、多数の心理動詞がヲ格か、ニ格かという単純格を使用するのに対して、「祈る」「感謝する」「希望する」「頼む」という四つの心理動詞はそれぞれ「～ヲ祈る」「～ヲ／ニ感謝する」「～ヲ希望する」「～ヲ頼む」といった単独格を使える一方、「～ニ～ヲ／～ヲ～ニ＋V」という複合的な格使用も可能である。後者は「対象ヲ＋相手ニ」という形で、心理動詞が及ぶ具体的な内容と相手を表し分ける文構造となっている。これはニで

表2：心理動詞のヲ格とニ格使用³

形式 単語	対象ヲ＋ 相手ニ ⁴	ヲ	ヲ/ (ヲ＋ニ)	ニ ⁵	ニ/ (ヲ＋ニ)	格の 不使用 ⁶
祈る	2	108	100.00%	0	0.00%	112
感謝する	5	16	9.94%	145	90.06%	50
希望する	2	60	100.00%	0	0.00%	10
頼む	82	115	100.00%	0	0.00%	256
愛する	0	165	100.00%	0	0.00%	12
諦める	0	17	100.00%	0	0.00%	58
恐れる	0	116	100.00%	0	0.00%	30
我慢する	0	19	100.00%	0	0.00%	54
信じる	0	139	100.00%	0	0.00%	378
心配する	0	58	100.00%	0	0.00%	95
後悔する	0	51	98.08%	1	1.92%	106
喜ぶ	0	104	92.04%	9	7.96%	282
迷う	0	3	12.00%	22	88.00%	168
悩む	0	3	7.14%	39	92.86%	101
飽きる	0	0	0.00%	6	100.00%	12
驚く	0	0	0.00%	290	100.00%	471
苦しむ	0	0	0.00%	81	100.00%	79
困る	0	0	0.00%	79	100.00%	414
疲れる	0	0	0.00%	10	100.00%	187
満足する	0	1 ⁷ -0	0.00%	69	100.00%	74

³ ここで、各動詞の各列に挙げた数値の重ね上げが表1の例文数に達していないのは一般的に見られるが、これは [ヲ＋ニ] [ヲ] [ニ] [格の不使用] の以外には、またデ格、ガ格、モ格などがあるからである。本研究では、ヲ・ニ格に中心とするものであるので、[ヲ＋ニ] [ヲ] [ニ] [格の不使用] の三項しか表2に示していないのである。

⁴ ここでのニは、心理活動、あるいは主体活動の向いている相手を表す。表2の5列目の対象や原因を表すニとは用法が違っている。

⁵ ここでは、相手を表すニを対象に入れず、「対象・原因」を表すニだけを視野に入れる。

⁶ 「格の不使用」というのは、「主格＋動詞」構造、あるいは動詞だけで文になる構造を指す。つまり、格成分がないということである。

⁷ ここのヲは動作対象ではなく、時間を表すという意味で、ヲの時間用法である。例文：「われわれはこのソリ旅行の大部分をこれをもって満足した。」

表される相手に向ける積極的な能動作用を表すものである。例えば、「先生に助けてくれたことを感謝する」文は、先生に感謝の意を受け取ってほしいという気持ち、「同僚に仕事の手伝いを頼む」文は、同僚に助けてほしいという気持ちを表すように、こういう文は、主体が何かをすることを表しながら、相手ニ格の付加によって、相手に受け取ってほしいとか、相手が何かを求められるとかいった相手への何らかの力の稼働が含まれる。これは「対象ヲ+相手ニ」構造による構文的制約を受ける心理動詞として扱う。一方、前者の単独格助詞使用の心理動詞はこういう構文を持たないので、構文的問題にならず、語彙的特徴の制約を受ける格選択の問題に留まっている。つまり、語彙的制約を受けるものと見なすべきである。

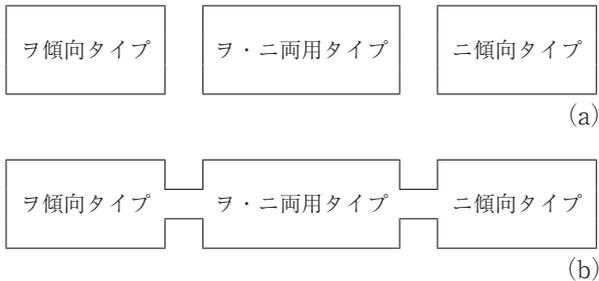
表3：心理動詞の格使用による分類

構文的制約を受けるもの （「対象ヲ+相手ニ」構文可能 ⁸ ）	語彙的制約を受けるもの （「対象ヲ+相手ニ」構文不可能、単独格助詞使用）		
	ヲ格使用傾向	ヲ・ニ格両用	ニ格使用傾向
祈る 感謝する 希望する 頼む	愛する 諦める 恐れる 我慢する 後悔する 信じる 心配する	喜ぶ 迷う 悩む	飽きる 驚く 苦しむ 困る 疲れる 満足する

表2と表3から分かるように、従来のように動詞を自、他動詞に分けて、自動詞がニ格、他動詞がヲ格というふうに説明するのでは、心理動詞の語彙・構文的特徴を明らかにすることができない。本研究では、語

⁸ このグループの動詞は「対象ヲ+相手ニ」の複合格で用いられる一方、単独ヲ格や、単独ニ格や、ヲニ格両用のタイプとして使われる場合もある。但し、「対象ヲ+相手ニ」を第一条件として、これらの動詞をグループさせることにした。

彙的特徴が心理動詞の格使用にどのように関与作用が発揮しているのかに着目するので、語彙的制約を受ける心理動詞、つまり、ヲやニという格助詞を単独で文中に使われる心理動詞を中心に研究を行う。表3から分かるように、これらの動詞はヲ格使用傾向、ヲ・ニ格両用とニ格使用傾向に分けられているが、本研究では、この三つのタイプの心理動詞は判然とした三種類を成している (a) のではなく、連続的、動的なもの (b) であることを主張したい。



この問題に関して、次のような二つの角度からのアプローチを試みる。

(I) ヲ格傾向の心理動詞からニ格心理動詞へ

「愛する」「諦める」「恐れる」「我慢する」「後悔する」「信じる」「心配する」のヲ格例文を分析することで、対象を表すヲ格は、述語動詞の語彙的特徴によって、原因の意味合いが読み取りにくいものと原因の読み取りが可能であるものと分けられることが分かる⁹。

まずは、原因の意味合いが読み取りにくいものとして、「愛する」「諦める」「我慢する」「信じる」がある。

⁹ 前項名詞の意味素性によって、原因の意味合いが読み取りにくいものと原因の読み取りが可能なものとの二分類には、個人的な理解によって差異があるが、基本的にそういう傾向が見られるという考えで取り扱っている。

- ①ダリアの強さと弱さ、長所と短所を愛していた。だがその妹は死んでしまった。(『刹那の情熱』)
(*¹⁰ダリアの強さと弱さ、長所と短所で／なので愛していた。だがその妹は死んでしまった。)
- ②そして、強情を張ることを諦めた。無駄な努力だと悟ったのだ。(『孤狼の絆』)
(??¹¹そして、強情を張ることで／なので諦めた。無駄な努力だと悟ったのだ。)
- ③先生が先に立ちあがった。すぐに行きたいのを我慢する。それでも、待ち連れずに卓也も席を立つ。(『私の童貞授業』)
(??先生が先に立ちあがった。すぐに行きたいので／から我慢する。それでも、待ち連れずに卓也も席を立つ。)
- ④わたしはこの線の成功を信じている。わたしのプログラムに反対する要人たちがたくさんいるのも知っている。(『神の吹かす風』)
(*わたしはこの線の成功で／なので信じている。わたしのプログラムに反対する要人たちがたくさんいるのも知っている。)

それに対して、構文的には何か手続きが必要となるかもしれない¹²が、ヲ格成分が意味的に原因読みの可能であるものには、「恐れる」「後悔する」「心配する」がある。

¹⁰ 「*」の付いた文は不自然な文を表す。

¹¹ 「??」の付いた文は文法上成立するが、意味上、元の文と違った意味を表す。

¹² ここで言う付加され得る手続きは、「する」の後に「かもしれない」を加えることや、「～すること」から文法の成立上、「こと」を取り除くことなどを指し、基本的には意味を変えないと考えられる。一方、例①でも、「長所と短所を愛していた」文に「長所と短所があるので、愛していた」というふうに変えれば文が成立するのであるが、「長所と短所」と「長所と短所がある」とは意味が異なるので、「がある」の付加はここでいう付加され得る手続きとは認められない。

- ⑤いまに、東京の盛り場の良い場所は第三人によって占拠され、租界化することを恐れる。(『世相心眼』)
(いまに、東京の盛り場の良い場所は第三人によって占拠され、租界化するかもしれないので、(それを)恐れる。)
- ⑥結婚しなかったせいで子供を持てなかったことを後悔している。父親になるというのはすばらしいことに違いないと昔から思っていた。(『マルベリー作戦』)
(結婚しなかったせいで子供を持てなかったことで／ので後悔している。父親になるというのはすばらしいことに違いないと昔から思っていた。)
- ⑦検定の過程が不透明になることを心配した。(『西日本新聞』)
(検定の過程が不透明になるおそれがあるので／かもしれないので、心配した。)

心理動詞の感情や心的活動の起因・原因を表すのは二格であるが、ここで、心理動詞のヲ格節も原因の読み取りが出来るということは、心理動詞の語彙的特徴の影響で、ヲ格の役割が二格の役割に移動していることを意味するのではない。

これを証明できる根拠として次のような現象も指摘できる。再び表2を参照されたい。表2の最後の列で示したのは、格成分もない、格助詞もない「格の不使用」の場合である。外的運動動詞は例えば「私はご飯を食べている。」のような文は普通に言うのであるが、「(私は) 食べている。」はあまり言えない。それに対して、表2のヲ格使用心理動詞を見ると分かるように、心理動詞は、目的語とそれを提示する格助詞ヲを省略して、「(私は) 心配している。」が普通に言える。このヲ格の不使用も、ヲ格心理動詞とヲ格外的運動動詞との相違が示されている。一方、

対象や原因を表す二格文は「ああ、困っている。」「私はもう飽きている。」のように、二格を普通に省略できることがあるので、ここで、心理動詞のヲ格も省略されるのは、ある程度、文法的にヲ格が二格の特徴を持つようになったことを意味しているのではないか。

上述の分析を通して、「恐れる」「後悔する」「心配する」において、ヲ格から二格への移動が見られることを主張する。

(Ⅱ) 二格傾向の心理動詞がヲ格心理動詞へ

二格傾向の心理動詞には「飽きる」「驚く」「苦しむ」「困る」「疲れる」「満足する」がある。その中には、ヲ格の使用もできる単語が混在していると思われる語もあるが、この問題は例文限定の仕方にある。本研究では、心理動詞述語文を分析してきたのであるが、そうでない心理動詞文、つまり、心理動詞が文中成分の構成要素として使われる文を調べると、二格使用傾向の動詞の間にヲ格使用の用法も出てくる。具体的には、「飽きる」「疲れる」「困る」「驚く」文は依然としてヲ格を使えないのに対して、「苦しむ」「満足する」はヲ格が使えるようになったことが分かる。

- ⑧ または肉体に対する気遣いからそうした欠如、あるいは何か別の、人間がその不運を苦しむようなことを悲しんだのではない。(不運に苦しむ。)(『古代キリスト教授訪』)
- ⑨ 人生は二十四年になるが、みごと二つの人生をともに成功に導き、十二分に己れの人生を満足しながら現世を去っていった“歴史上”の人物がいた。(人生に満足する)(『日本創始者列伝』)

「苦しむ」「満足する」は心理動詞述語文に用いられる時、「二」格使用であるが、文中成分の構成要素として用いられる場合、二格使用の

ほかに、ヲ格でも使えるようになっている。ここから心理動詞の格使用と解釈は動詞が文中における位置に関わっていることが一目瞭然である。これは本稿の研究対象を心理動詞述語文に限定する原因でもある。現段階では、この差異の生じる原因は心理動詞の安定性にあるのではないかと考えているが、具体的にどのように構文と関わっているのかについては、今後の研究を待たなければならない。但し、今確かなことは、「苦しむ」「満足する」にヲ格用法が見られることである。つまり、動詞が文末述語から文中成分の構成要素に変わるにつれて、ヲ格を選択する能力を持つようになったということである。これは、「苦しむ」「満足する」がニ格の原因・対象機能から、ヲ格の対象機能へ転移する能力を持つことを物語っているのではないと思われる。

ここまで、心理動詞の格使用について、語彙的制約を受ける心理動詞、つまり、単独格助詞が使われる心理動詞の格使用の特徴と連続性は図1のように表すことができる。

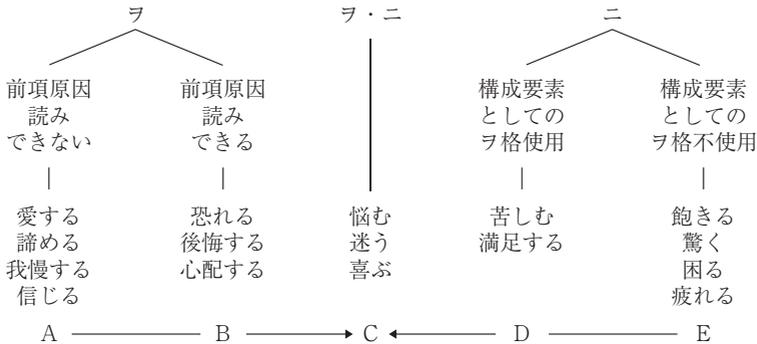


図1

図1が示したように、AからEまで、ヲ・ニ格両用のC類を中間位置にして、Aはヲ格使用傾向、Eはニ格使用傾向であり、Bはヲ格使用と

いうものの、ニ格のD、Eへの移動が見られ、Dはニ格使用というものの、ヲ格のA、Bへの移動が見られる。つまり、ヲ格使用傾向、ヲ・ニ格両用とニ格使用傾向とは、連続的なものとして捉えられるのである。

四、理論分析

外的運動動詞の研究にあたり、他動性や意志性がよく検討されているが、他動性でも意志性でも強弱度合いがあると扱われてきたが、基本的には、他動詞がヲ格愛用、自動詞がニ格愛用、意志動詞がヲ格愛用という傾向があると言えるであろう。ところが、他動性でも意志性でも、その動作が「意識的にしたか否か」「する行為が相手に影響を及ぼすか否か」「行為が故意的であるか否か」などの点をめぐって検討されている。それに対して、心理動詞の場合、内的な活動を表すもので、外見的に見えない特徴があるので、上述の分析を行うには、抽象的で、判断しにくい特徴がある。そのため、心理動詞のヲ格とニ格に関して、他動性と意志性では心理動詞の格使用問題をはっきりと説明することができないのである。心理活動の主体（多くの場合は経験者）が心理動詞の表す活動にどのように関与しているか、また、この関与作用は心理動詞の格形式使用とその格機能の解釈にどのような関係あるのかが問題となってくる。

さて、この「関与作用」は果たして何であろうか。

森山（1988）は「動詞がその表す動きを発生・成立させるための、主語名詞（あるいは動作主名詞）の、動きに対する自律的な関与の度合い（p201）」¹³を主体性と規定し、日本語の各表現形式の主体性の強弱を分析した。但し、森山氏が提出したこの主体性は心理動詞にではなく、す

¹³ 認知言語学において、主体性という概念をしばしば用いるが、それが「認識主体が外部世界を解釈し、言語表現にする時に知覚・認識的な特性」という意味で、本研究でいう主体性は別分野のものである。

すべての動作表現に用いられる概念であるので、それを心理動詞に用いると、いくつかの変容が起こる。まずは、心理動詞の主語名詞はモノではなく、人¹⁴である。しかも、心理動詞が表すのは内的事象を表す心理活動であるので、他人に及ぼすか否か、故意的であるか否かよりもっと繊細な内的分析が必要となる。森山氏の主体性分析に沿って言えば、これよりもっと先の段階、つまり、内心活動の分析を行うことである。従って、森山（1988）を踏まえ、心理動詞の主体性を心理動詞の語彙の特徴に合わせてその格使用と機能に大いに関与する概念として以下のように修正規定する。

「心理的動作や変化の主体（経験者）のその心理的活動に対する意識、制御、駆動力などの関与作用の度合い」

さて、心理動詞の主体性の強弱は心理動詞の格使用とはどのような関係があるのであろうか。

上述の分析を通して、前節の図1が示したように、心理動詞の格助詞使用は語彙的制約を受けながら、形式的には、ヲ格使用傾向、ヲ・ニ格両用、ニ格使用傾向というふうになっている上に、ヲ形式がニ形式へ移動したり、ニ形式がヲ形式へ移動したりというふうに格の選択や機能は連続している。これを心理動詞の格助詞が担う機能を心理動詞の主体性に合わせて分析すると、図2のような関連が考案される。

仁田（2010）で「動詞の格支配は、その意義との密接な関係にある」と述べたように、心理動詞の格支配もその意義と密接な関係を有する。「心理活動の主体が心理動詞の表す内容を「主体性」で把握する活動で

¹⁴ 擬人化された場合は、モノや動物が考えられる。

ヲ格とニ格の使用から見る心理動詞の語彙的特徴
 —心理動詞述語文を中心に—

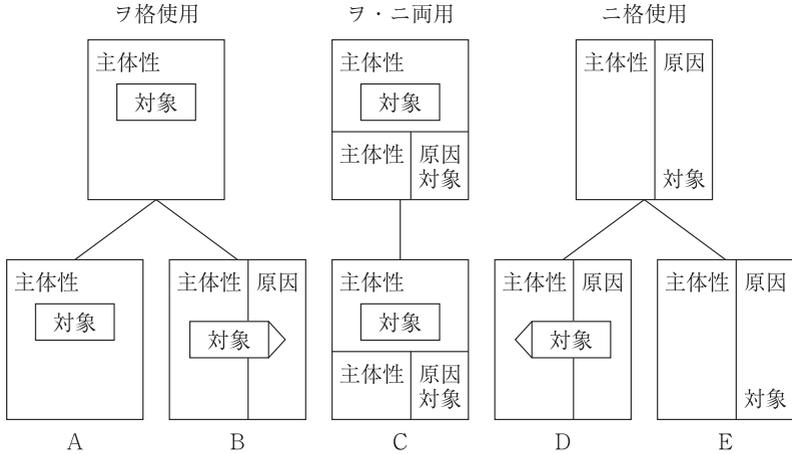


図2

ある」と各心理動詞述語文の表すものを理解するなら、動詞の語彙的意味によって、主体性の強弱が生じるため、格助詞使用と格使用の機能差が出てくる。具体的に見ると、心理動詞において、ヲ格が対象を表し、ニ格が対象と原因を表すことはよく認められている。役割から見ると、心理動詞のヲ格が表す対象は内的要素を表すのに対して、ニ格の表す対象は「刺激要素」という意味合いでより外的な要素を表す傾向が読み取れる。そのため、ヲ格が表す対象は動詞に含まれる内包的なもので、動詞がそれをまるごと制御した上で文が成立するので、必須的であるのに対して、ニ格が表す対象・原因は内包的な意味を持たず、外的な付加要素（刺激）を表し、付加詞視されるほど主体活動にとっての補助的な存在である。従って、A、Bがヲ格を取り、主体性が内的対象を制御した上で心理活動は成立するのである。つまり、主体性は包含的で、心理動詞の表す活動全域に亘るということである。対応的に、D、Eがニ格を取り、基本的に、「主体性制御+外的対象・原因」という組み合わせ

で文が成り立つため、主体性が外的対象・原因という補助要素に一部失われ、主体活動の一部しか占めていないので、主体性の働きは弱まっている。つまり、A、Bは主体性が強く、D、Eは主体性が弱く、Cは内的対象にも使えるし、外的対象や原因を接続できるので、無論その中間的な位置を占めているということである。さらに、A、Bにおいて、Bのグループには、原因の読み取りが可能であるので、ヲ格がニ格に転移した傾向が見られる。つまり、内的対象が外的要素に転じ、主体活動における外的要素の割合が強くなってきて、主体性の制御力が弱くなるのである。言い換えれば、Bの主体性はAより弱いということである。更に、Dグループの動詞が文末述語ではなく、文中成分の構成要素として使われると、ヲ格使用ができるようになるので、D類が表す心理活動の外的要素が内的対象に転移する傾向があり、外的要素の割合が少なくなり、内的要素の包含が強くなってきて、主体性のコントロール域が大きくなると考えられることから、EよりDの主体性が強いことが分かる。

つまり、主体が心理動詞の表す内容を「主体性」で把握した心理活動に関しては、心理活動の構成要素は外的であるなら、{主体活動 = [主体性 + 外的]} という形で、主体性が弱いと見られる一方、構成要素は内的であるなら、{主体活動 = [主体性 [内的]]} という形で、主体性が強いと見られるということである。外的・内的の相互移動によって、主体性の度合いも段階的に変化していく。従って、他動性や意志性でうまく説明できない心理動詞の格使用は、主体性と密接な対応関係を有すると言えるのである。

また、図2では示されていないが、構文的制約を受ける「祈る」「感謝する」「希望する」「頼む」に関しては、「対象ヲ + 相手ニ」という構造に用いられるので、主体性が対象を制御した上で成立した主体活動はまた他の人（ニ格で表す相手）に作用する。つまり、主体性は自己完成

の駆動力だけではなく、相手にかける力も持っている。そこで、上述した五つの種類の心理動詞より主体性が強いと予測するが、これに関する詳しい論述は別稿で検討する。

要するに、上述の論理筋を逆に整理すると、格の使用が語彙的制約を受ける心理動詞においては、主体性の強弱変化に従い、格の選択と役割が規律的に変化していくことが言える。つまり、主体性の強いものから弱いものへと、ヲ格、ヲ・ニ両用格、ニ格という順になっている上に、ヲ格の中で主体性の弱いものはニ格へ移動し、ニ格の中で主体性の強いものはヲ格へ移動することが見られる。こうして、心理動詞の主体性に従って、その格使用、格機能の解釈を統一させながら、連続的に捉えられることが分かる。

五、結論

本稿では、心理動詞の格使用特徴を解明するために、国立国語研究所の少納言を資料にして20語の心理動詞を抽出し、その述語文を検討した。それによって、心理動詞の格使用には、ヲ格使用、ヲ⇒ニ格変動、ヲ・ニ格両用、ニ⇒ヲ格変動、ニ格使用という五種類があり、語彙的な意味特徴に基づいて連続の様相を呈していることが分かった。そして、その連続性を作り出すのは、「心理的活動に対する主体（経験者）の関与作用の度合い」を内容とする主体性に深く関わっていることを指摘した。

本研究で解明したことを次のようにまとめることができる。具体的には、

- (1) 心理動詞はその特殊性によって、自他性の判明が難しく、他動性や意志性より主体性のほうが心理動詞の意味的特徴をうまく把握できると主張した。
- (2) 心理動詞のヲ格ニ格の使用に関して、動詞が文末述語として用

いられるか、文中成分の構成要素として用いられるかによって格助詞に対する要請が異なる。文末述語の場合、心理動詞の格使用は構文的制約を受けるものと語彙的制約を受けるものに分け、語彙的制約を受けるものにおいては、心理動詞の主体性が格使用とその格成分の解釈に大いに関与していることを提唱した。さらに、一般的に使用されているヲ格の対象機能は心理動詞に用いられると、心理動詞の語彙的特徴によって、格機能の解釈に変化が生じ、原因という機能解釈を持つようになるなど、動詞の語彙的意味が文法的規則に大きな変化を及ぼしていることを裏付けている。

- (3) 心理動詞の格形式の選択とその役割の解釈においては、心理動詞の主体性と関連させながら、連続的な視点で捉えられることを明らかにしたことによって、心理動詞の体系的な研究を一步前進させた。

さて、本稿で検討した問題と関連して、まだ未解決なところがあるように思う。例えば、Dグループの心理動詞はなぜ文末述語で使われる時に、ニ格だけが使用され、文中成分の構成要素として用いられる時にヲ格もニ格も使えるようになるのか。また、本稿では、「思う」などの特殊心理動詞を取り扱っていないが、これらの心理動詞にはどんな文法的なルールがあるのか。C類の「悩む、迷う、喜ぶ」はヲ・ニ格両用動詞として中間的な位置を占めているが、両端のB類とD類との連続の仕方、そして、構文的制約を受ける心理動詞は主体性や格使用と解釈において、ABCDE類の心理動詞とどのような関係を持つのか、これらは今後の課題とする。

参考文献

- Michiko BANDO (1996) 「Semantic Properties of - Ni NP and - O NP of Japanese Psych-verbs」, 『大阪大学言語文化学』 5, pp.165-177.
- 今井洋子 (2000) 「上級学習者における格助詞「に」「を」の習得—「精神的活動動詞」と共起する名詞の格という観点から—」, 『日本語教育』 105, pp.51-59.
- 岩澤勝彦 (2000) 「感情語と前置詞」, 『大東文化大学紀要人文科学』 38, pp.1-13.
- 小野正樹 (2005) 『日本語態度動詞文の情報構造』, 東京：ひつじ書房.
- 小野良美 (1995) 「日本語の他動性—意志性を中心に—」, 英米文学研究 31, 梅光女学院大学英米学会, pp.265-279.
- 金水敏 (1989) 「「報告」についての覚書」, 『日本語のモダリティ』, 東京：くろしお出版, pp.121-129.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』, 東京：ひつじ書房.
- 小竹直子 (2011) 「日本語心理述語文のアスペクト：話者による事態の捉え方の観点から」, 博士論文 [2011]. 広島大学大学院・教育学研究科.
- 国立国語研究所 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』, 東京：秀英出版.
- 佐藤響子 (1997) 「ニ格名詞句をとる心理動詞」, 『横浜市立大学論叢人文科学系列』 48, pp.117-138.
- 新屋映子 (1989) 「日本語の主観用言における人称制限」『日本語学科年報』 11, 東京外国語大学, pp.3-14.
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』, 東京：ひつじ書房.
- 高山弘子 (2014) 「二項動詞文に見られる格助詞「に」と「を」の交替」,

第37回中日理論言語学研究会口頭発表.

- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』, 東京: くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』, 東京: くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』, 東京: くろしお出版.
- 長野ゆり (1993) 「感情表現の動詞「(誘因) = Vスル」の人称制限について」, 大阪大学日本学報12. pp.51-62.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』, 東京: ひつじ書房.
- 仁田義雄 (1993) 『日本語の格をめぐる』, 東京: くろしお出版.
- 仁田義雄 (2009) 『日本語の文法カテゴリーをめぐる』, 東京: ひつじ書房.
- 仁田義雄 (2010) 『語彙論的統語論の観点から』, 東京: ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (2007) 『現代日本語文法 3 アスペクト・テンス・肯否』, 東京: くろしお出版.
- 堀川智也 (1991) 「心理動詞のアスペクト」, 言語文化部紀要21, 北海道大学. pp.187-202.
- 益岡隆志 (1997) 「表現の主観性」『視点と言語行動』, 東京: くろしお出版. pp.1-11.
- 松野美海 (2010) 「ヲ／ニ格両用型感情動詞の諸特徴について」, 『名古屋大学国語国文学』 103, pp.228-214.
- 松本曜 (2003) 『認知意味論』, 東京: 大修館書店.
- 三枝令子 (2011) 「感情を表す動詞「困る」が示すテンス・アスペクト」, 一橋大学国際教育センター紀要 2.
- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」, 日本語科学 8, pp.54-75.
- 村木新次郎 (1982) 「動詞の結合能力をめぐる」, 『日本語教育』 47, pp.13-32.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』, 東京: ひつじ書房.

- 森山新（2008）『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』，
東京：ひつじ書房。
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』，東京：明治書院。
- 山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』，東京：くろしお出版。
- 吉永尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』，大阪：和
泉書院。